

昭和二三年 四月 石川県バレーボール協会会長となる。  
昭和二六年 七月 全日本大学バレーボール選手権大会を金沢市に開催。昭和二七年四月会長を辞任。

昭和三六年 一月 住吉工業会理事長就任。  
昭和三六年 四月 同工業会を解散し、発展的に住吉工業協同組合を設立し、理事長となる。  
昭和三六年一〇月 住吉工業会館を竣工し、昭和三七年二月、理事長を辞任。

この間、金沢国税局地方資産再評価調査会幹事(昭和二六年四月)。石川県体育協会理事(昭和二七年四月)。石川県物産協合理事(昭和二五年四月)。石川県商工組合連合会理事(昭和二七年四月)。金沢実業会理事(昭和三一年五月)。金沢経済同友会幹事(昭和三一年六月)。北陸日米文化協会理事(昭和三五年九月)。石川県対岸貿易振興協会副理事長(昭和四二年五月)。金沢駅西開発協議会監事(昭和五三年一月)など歴任。

表彰 昭和三八年二月 石川県知事及び石川県中小企業団体中央会長。  
叙勲 昭和五三年二月 勲五等双光旭日章拝受。  
表彰 昭和五五年五月 日本商工会議所会頭。  
褒章 昭和五六年五月 内閣総理大臣。(金沢市へ美術工芸振興基金寄贈)  
顕彰 昭和五七年九月 石川県知事。(石川県美術館へ美術品数点寄贈)  
著書 “わが網網界の回顧”(昭和三七年一月出版 A五判二三〇頁)  
“随想・陀羅仏”(昭和四二年一月出版 A五判二八〇頁)

## 私のロータリー歴

昭和二八年三月一日 金沢ロータリークラブ 入会(四五歳)  
昭和二九年一三〇年 〃 〃 会場監督  
昭和三〇年一三一年 〃 〃 幹事  
昭和三〇年一三一年 第六一地区年次大会(金沢市) 大会幹事  
昭和三二年三月一日 皆出席五ヶ年  
昭和三三年六月 金沢東ロータリークラブ 創立、移籍  
昭和三六年一三七年 〃 〃 副会長  
昭和三七年一三八年 皆出席一〇ヶ年 会長(五周年記念事業実施)  
昭和三八年三月一日 第三六〇地区岡田良介ガバナーの補佐(ガバナー月信編集担当)  
昭和四一年一四二年 ロータリーの友 第三六〇地区委員  
昭和四二年一四四年 皆出席一五ヶ年  
昭和四三年三月一日 創立一〇周年記念誌編集  
昭和四三年六月 “ロータリアン読本” 編集自費出版  
昭和四四年一四五年 第三六一地区年次大会(金沢市) 計画委員長  
昭和四五年一四六年 第三六一地区矢橋六郎ガバナーの石川県分区代理(富来、能美、志賀RC創設)  
昭和四五年八月 “ひろがれまわれ” 編集自費出版  
昭和四八年三月一日 皆出席二〇ヶ年

- 昭和四八年一〇月 金沢北ロータリークラブ 創立、移籍  
 昭和四九年二月号発表 「ロータリー何をなすべきか」 入選一席  
 昭和四九年一月 金沢北ロータリークラブ主催 職業奉仕に関する研修会主宰  
 昭和五〇年四月 金沢北ロータリークラブ出版 「お、ロータリアン―職業奉仕とは」 編集  
 昭和五一年三月 金沢北ロータリークラブ(ホスト) 石川県第一分区I・C・G・Fの運営企画  
 昭和五二年四月 金沢北ロータリークラブ出版 「お、ロータリアン―ロータリーとは」 編集  
 昭和五三年三月一日 皆出席二五ヶ年  
 昭和五三年一〇月 米山記念奨学会功労者  
 昭和五八年三月一日 皆出席三〇ヶ年  
 昭和五八年七月 「随想私のロータリー三十年」 出版 A五判三〇八頁

## 私の海外見学

- 東南アジア 昭和三九年二月一二日羽田空港発、二月二三日羽田空港帰着。  
 シンガポール・バンコック・ホンコン・マニラ・台北、一二日間。  
 ソヴェート 昭和四七年八月二一日金沢港発、九月一日七尾港帰着。  
 ナホトカ・ハバロフスク・イルクーツク・モスクワ・レーニングラード、一二日間。  
 中 国 昭和五二年一月六日大阪空港発、一月二二日大阪空港帰着。  
 上海・蘇州・南京・揚州・北京、一七日間

## あとがき

「わが網網界の回顧」昭和三十七年十一月刊行

私は、昭和三十七年十一月、業界史「わが網網界の回顧」を刊行した。これは古い伝統と歴史ある石川県の漁網業界に、全く記録らしいものが残されていなかったもので、当時、同業界の心ある人々の中に強い要望があり、私自身も、その必要を痛感していた。しかし或る程度の資料が整っておれば、その道の専門家に依頼し、まとめてもらえるのである。が、それが全くない。あるものは、当時の業界元老達の記憶の中にあるものだけである。一方、私は、昭和二年七月、この道に社会への第一歩を踏み出して、当時、三十五年の業界歴、経験、見聞が身につけている筈である。かくして対策を協議している内に「やって呉れぬか」と、勧められ、また、おこがましくも、私がやらねば……と、言う気にもなつて、とうとう買って出る破目になったのである。

私は、業界の元老達を個々の自宅に度々訪ね、時にはお集り願って、古い記憶を呼び起

してもらったり、まさに並々ならぬ苦労を重ねつつ資料を整え、当時、暑い夏の夜を幾十

日も原稿書きを続けた。その苦労は、出来上った時に、この上ない喜びとなり感謝もされた。その出版記念会の席上、来賓の北国新聞社主筆の、上山南洋氏は「すばらしい偉業である。柴田さんは定めし、この本を毎日枕元に置かれることであろう……それは著書を出した者だけの知る喜びである……」と、述べられたのを、今もって記憶に残っている。

若さのファイトとは言え、よくぞ、あれだけのものを独力で、しかも短時日にまとめ得た……と、おこがましい限りであるが、業界にとっては、今は不滅の業績と自負して止まない次第である。

#### 随想 “陀羅仏” 昭和四十二年十一月刊行

私の雑文書きが、いつとはなしに始まっていた。新聞、雑誌、機関誌などから頼まれたり、時には、こちらからお願ひして載せてもらった拙文がたまってきた。後日読み返えしで、よくも凶々しく天下の公器に曝したのかな……と、穴があつたら入りたいような思ひをすること一再ならずである。しかるに、飽きもせず、こりもせず書き続けて来たものかなである。もちろんビター一文カネになるようなものではない。

この雑文書き、ハタから眺めると、いかにも苦勞しているように見えても、当の本人は

原稿用紙の箱を埋めている時が、すべてを忘却の無我の境地であり、時には夜の更けるのを忘れても、疲勞感を覚えないようである。かくして、たまった雑文の寄せ集めが、昭和四十二年十一月出版の、随想 “陀羅仏” である。

ダラな事だ……と、笑われることを覚悟の上の暴挙である。経済誌 “財界” の三鬼陽之助氏は「社長、本を書くべからず」と、警告している。さもありなん。しかし、これが、わが人生の唯一なる記録であり、歴史であり、足跡であり、わが顔であり、心であり、声であり、頭の体操にもなったようである。

この “陀羅仏” の中から数篇、こんどの新著の中へ再録いたしました。

#### “随想私のロータリー三十年” 昭和五十八年七月刊行

“陀羅仏” の出版以来、約十五年ぶり、こんどの拙著 “随想私のロータリー三十年” の上梓となった。これが私の最後の刊行となるであろうと思つたと、あれも載せ、これも加えたい、書き遺したい……と、欲が出て、原稿の選択に困つた。而して、こんどの出版書の命名に迷つた。中味は折々の雑文集であり、またロータリーの機関誌に載せてもらった時の、ロータリーに関する随感であり私見である。もちろん、論文と言えりようなものではない。強いて言えば “ロータリーの友” 公募の “ロータリー何をなすべきか” の一篇で

ある。思いかけぬ入選一席の光栄となった。私のロータリー歴の決算書でもあった。幸い当時、各地のロータリアンの方々の話題となり、少からぬ反響もあったのは、望外の欣びであった。十年後の今も、私はこの主張に、改変し訂正すべきところは無い……と、確信しているのである。

かような次第で「折々の随想に加えて、ロータリーに対する私見の寄せ集め、而してこの三十年間の私の所産」と言うのが実態である。これを略して「随想私のロータリー三十年」と、名付けたものの、正確な表現とは言えず、今も釈然としないのがホンネである。かく、あいまいで、乏しい内容のこの雑文集に対し、華麗な花束をそえていただき、箔をつけてくださったのは、金沢市長、江川昇さん、並びにバスタガバナー、矢橋六郎さんの、身に余るお言葉である。御両所は、ともに、私が久しく温いご友情を賜っており、私には貴重な畏敬の方々であり、恐縮いたしつつ、厚く御礼申し上げる次第。また、画伯の一面を持たれる矢橋さんは、その作品をそえてくださった。欣びに堪えない。

失礼ながら、諸橋轍次先生著の論文の一節を拝借して、拙なき本書のため、巻頭を飾らしていただき、併せて誌面の随所に、同先生著の『中国古典名言事典』の中から名訓を拝借してもらった。お恥かしい次第ながら、「七十にして、心の欲する所に従えども、矩を踰えず」と言われる年頃近くになって、やっと論語をかぢり始めた。遅きに失したことを

今更ながら痛恨に思っている。

私どもの金沢北RC自慢の特長のひとつとして会員の中に、人間国宝の蒔絵の大場さんを始め、陶芸の長谷川さん、金工の魚住さん、漆芸の坂下さん、写真の関さん、絵画の吉田さんなど六人も芸術家があり、会員の一〇%を占め、香り高き異彩を放っている。この方々の御協力により、本書に光彩を副えていただき感謝に堪えない。吉田画伯の『西王母』の麗花は、本書の表紙カバーに使わせていただいた。この作品は、私のロータリー三十年を祝って、金沢北RCから記念に拝受したものである。

ロータリーの根幹は「職業奉仕」と言われている。これを口実にしたようであるが、私の人生形成の根本は、私が天職と心得、よりどころとする『中外製網株式会社』であり、『漁網製造』が、私の職業分類である。かような次第で、私の経営理念として、先年、わが社の社歌を自作、併せて『日々の人生道しるべ』を策定し指標とした。いづれも末尾にご紹介したが、いささかPRで恐縮。

今は亡き西川外吉さんは、わが人生の恩師であり、敬慕して止まない。その人格、識見手腕に、この上なく私淑し、至大なる影響力を受けた。私の、かつての著書『わが網綱界の回顧』および次の『陀羅仏』に、心のこもったお言葉を寄せてくださった。私は、この上ない光栄と欣びを、身にしみてかみしめた。西川さんが、拙著『陀羅仏』にお寄せくだ

さった文中に「陰謀やら憎しみ合い、そして作り笑いをしながら面従腹背の……」。私もはや古稀に近い。これからの人生の余白をどうして意義あるものとするかに悩みをもって……」。多くの人々は、人生終焉の瀬戸際に立って過去を惟い、自己の生活の価値につきて果して割切ってゆけるだろうか……。など綴られている。まさに西川さんらしい人生観の一端が拝察される。私は、この惟いを、私への遺訓として、時折り反芻させてもらっている。西川さんが逝かれて、この六月十六日は、満十五年のご命日である。私には最後の出版となる、拙なきこの著書を、謹みて西川外吉さんの御霊に捧げます。 合掌

昭和五十八年六月佳日 網明庵漁入記



## 随想私のロータリー三十年

著者 柴田三郎

中外製網株式会社内  
金沢市南森本町ホ五〇  
郵便番号九二〇一〇一  
電話(〇七六二)五八一三一一

発行 昭和五十八年七月一日  
印刷 大村精版印刷合資会社



石山  
士  
九

